

25年ぶりのセネガルへ

～25年間の時間の流れとは～

25年前にセネガル川添いのリシャートルの町で土壌調査、牧草栽培の試験調査に参加して以来、久しぶりにセネガルを訪問する機会を得た。セネガル川沿いのリシャートルは乾燥しており、降水も少ないため、セネガル川の水を利用した灌漑農業の調査に参加したのに対し、今回の調査地はカオラックである。

カオラックは、首都ダカールから南東へ車で約4時間にある。近くには塩水の Saloum 川が流れ、降水量も 700mm 程度あり、天水農業も可能となっている。トウモロコシや野菜の栽培も盛んであるが、カオラックは、セネガル内では落花生盆地と言われる落花生生産地帯の中に位置している。周辺には多くの落花生の畑が広がっている。落花生栽培は、セネガルの独立以前の旧宗主国時代からプランテーション栽培で行われてきており、セネガルのピーナッツオイル輸出量は世界の 3 割を占めており、国の一大産業となっている。カオラックにも大規模な搾油工場があり、工場の近郊には山のように積みあげられた落花生が見られる。また、落花生は非常に利用価値の高い作物で、もちろん子実は食用・搾油用に、また殻は発電や土壌改良材としても使われている。さらに、残渣(植物体)は栄養価の高い家畜の餌として貴重な資源となっている。しかし、長年の連作により土壌の劣化が進んできており、この対策も政府の重要課題とされている。

ところで、カオラックは日本人仲間ではもう一つの言われ方で有名である。それは「ごみだめの町」である。カオラックは交通の要衝にあり、多くのトラックやバス・タクシーが行き来する中、なぜか町のあちこちにゴミが積まれている。ここをよく知る日本人に聞くと、これでもまだましになったとの話である。現地に入った当時は雨期だった。カオラック周辺の Saloum 川の水はゴミと生活排水で黒くよどみ、時には異臭を発する。また町のあちこちにできる水たまりも黒く濁り、外出するときは避けながら歩かなければならない。乾期になるとこんどは粉末化したゴミが大気中に飛散し、ちょっとマスクがほしくなることも多い。このような時は、あまり町にも出歩きたくなる。

さて、25年ぶりのセネガルであったが、カオラックの町には現在も多くのロバや馬の馬車がタクシー代わり

に利用されている。もちろん車やバイクのタクシーも多く走っている。野菜市場ではのんびりと野菜の値段交渉をした買い物客が、帰りにはこれらタクシーを利用して帰宅していく。また、道路はあちこちで舗装はがれている。このような光景を見ると、「あれっ、25年前とあんまり変わらないなあ」という感覚になる。

我々の仕事の中では、PC 利用があたりまえとなり、通信も FAX/手紙から、e-mail に大きく変化していく中、カオラックの町の生活のテンポはゆっくりと動いているように感じられた。この差が結局は、時代に乗ったものと乗り遅れたものの差なのかもしれない。我々は世界のどこにいても、毎日当たり前のようにメールチェック行わなければならない。また、それへの対応のため、地球上のどこにいても、会社や他のプロジェクトの業務に追いまわられている。仕方ないとは言え、顔も見合わない中で進んでいく業務とはうらはらに、現地ではお茶の一杯で始まる農民との会話のギャップの大きさを、このセネガルで感じてしまった。

(2011年12月 財津)



飼料としての落花生残渣を山積みして走るトラック



落花生の風選風景

援助からビジネスへ～支援から協働 <その 4>

日本の農業との協働

これまでも AAINews で何回も取り上げているように、国際耕種は岡山県牛窓地区において農業後継者育成や農業支援の活動を展開できないか模索中である。今回はこの牛窓における活動をベースにした「地域活性化モデル」を構想してみたい。

日本農業の大きな課題として、農業者の高齢化や後継者不足、耕作放棄地の増加が以前から指摘されている。また、農業にもビジネスの視点や経営感覚が必要、あるいは作るだけではなくマーケティングが重要、という提言も言い古された感がある。

地域作りの「核」は人材であり最も重視しなければならない。その育成には地元のリソースを最大限に活用した手法を用い、後継者育成と地域の活性化を図る。後継者育成のための研修事業として、地元農家を講師として技術や知識、知恵を伝える「農業塾」を企画し、研修プログラムや研修教材の開発と研修実施を通じた後継人材の育成を図る。研修コース案としては次のようなものが考えられる。

- (1) 農業初級コース（新規就農者対象の入門コース）
- (2) 農業中級コース（新規就農者、就農若手農家対象の中級コース）
- (3) 農業体験コース（学生・一般対象）
- (4) 家庭菜園コース（家庭菜園を楽しみたい一般向け）

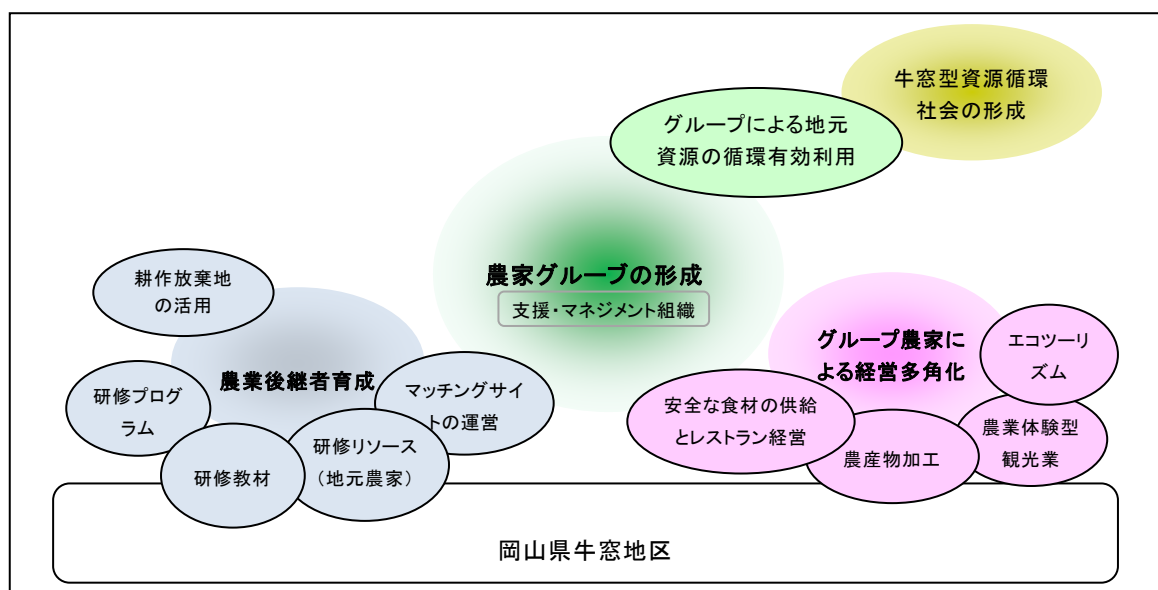
また、就農希望者と後継者・援農者の募集先をつなぐような、インターネット上のマッチングサイトを運営することも考えられる。

農業経営面に対する方策としては、農家のグループ化による複業化や多角化を図るグループ営農を実現して、収入増加や経営の安定化をめざしていく。具体的には、消費者への安心・安全な食材の供給及び地元の食材を生かしたレストラン経営、農産物加工による高付加価値化、農業体験等と結びつけた観光業、エコツーリズムの開発等が考えられる。個別農家が多角化していくのはなかなか困難であったり、リスクが大きすぎたりするが、グループ化によってそれを低減させていく。

こうした後継者育成事業やグループ営農による多角化を進める過程を通して、地域における農家グループの形成をめざしていく。また、グループ化やそれぞれの活動を支援し、マネジメントしていくようなコンサルタント的な役割の組織も必要であり、このあたりに国際耕種が関わっていける可能性がある。さらに、こうした農家グループの存在によって、構成農家の農業経営をより確固としたものに支えていくことが期待されるとともに、グループによる地元資源の循環活用にもつなげていき、将来的には牛窓型の資源循環型社会の形成を実現する。

営農というのは、本来、「手段」である。活動を継続していくための経済的な基盤はもちろん必要であるが、単に儲かることだけをめざすより、存在すること自体に意義や価値がある仕事もある。“Profit”だけではなく、“Value”を追求するという営農の在り方もある。

あるアンケートによれば、老後は都会で生活したいと答えた人が 75%であったという。自分が住みたくなるような魅力的な地域作りをめざすこと。現在の日本のような高齢化社会の中では、そうした試みも求められているのではないだろうか。



クルドの農業と農民 <その4>

イラクの果樹生産

クルド地域は、イラクの北部に位置して冷涼かつ乾期の乾燥気候を利用した果樹栽培も盛んである。果樹栽培は主に山岳地の傾斜地で行われている。

主要な果樹生産としてリンゴ栽培を多くの地域で聞いた。他にクルミ、アンズ、ザクロ、モモ、ブドウがある。聞き取りをした農家では、リンゴやモモは生食用、アンズ、ブドウは乾燥用、ザクロはジュース用として利用されていた。街の市場では各種のナッツ類が売られている。

果樹は専門ではない筆者の目ではあるが、手入れも比較的良く行われていたように見受けられる。剪定、整枝、摘果、除草、農薬散布なども一般的に行われている。果樹は比較的儲かる作物のようだ。小麦栽培から果樹栽培に切り替えた農家もいる。ただ、果樹栽培地はクルドでも北部や傾斜地での栽培が多い。傾斜地での栽培であるため大規模化は困難である。このような状況で、広い農地を持たない山岳部の農家は、果樹へ切り替え、収入の向上を目指そうとしていると考えられる。つまり、山間部では有望な現金収入の生業と言える。

しかし、クルドの果樹栽培は長年の戦乱により、大打撃を受けてきた。特に山岳部は戦乱の激しかった地域で、農民はイラクや周辺地域に難民として避難し、その間、果樹園は放置されたままになってしまった。訪問した Dohuk のトルコの国境に近いクルミ産地の村では、1975 年から 1990 年代上半旬まで戦乱で当地から避難し、その間農地は放棄され、現在でも村へ帰ることはできずに、近隣村に住んで収穫のみを行っている聞いた。また、農業だけの収入では生活できず、年金や一時的な軍隊での労働により生活を維持している状況であった。

このような中で、政府の果樹生産拡大への普及現場を見学した。Dohuk 地域北部では、すでに 10 カ所のリンゴ栽培プロジェクトを開始し、250 人に研修を行っている。この近隣地ではスペインから導入したリンゴ苗を農家に委託栽培し適性試験を行っていた。また、首都近郊の農家では、リンゴとジュース用のザクロを栽培しており、その一角でリンゴの試験栽培を行っていた。さらに、Erbil にあるアインカワ農業研究所では、リンゴ・

ブドウの導入品種 180 種について試験栽培を継続中である。

果樹栽培は導入から収穫まで時間がかかる。また、年間を通した管理作業が必要だ。リンゴに関する栽培管理では、摘果、剪定作業の有無は農家によりまちまちであった。農薬散布はどこでも適用され、施肥は開花期のあとでコンポストと化学肥料を施用していた。灌漑は 3-11 月に行われるが、多くは井戸水を利用している (Erbil)。山岳部では急傾斜地にそって古い水路が張り巡らされているところもあったが、現在は管理されていない場所もおおい (Dohuk)。

果樹生産の課題の一つは、野菜同様にマーケティングとされている。一般的に果樹生産地は消費地から離れたクルド北部および西部の山岳地帯に広がっている。しかし、生産物の輸送は農家自身で行っている場合が多いようだ。仲買人による生産物流通の話は聞かなかった。農家は消費地まで自力で輸送、そして市場で販売しなければならない。小規模で輸送手段を持たない農家が多い中での、農家自身による生産物販売は負担も多いと考えられる。さらに海外産の高品質果樹の輸入も一つの脅威であろう。海外産と対抗できる高品質果樹の生産と、上記したような流通問題などの解決策を見いだしていかなければ、クルドの果樹産業も発展していかないであろう。ただ、果樹栽培に適した環境だけは十分にあることから、やり方次第では今後の発展も期待できると考えられる。



山岳地帯の果樹園



リンゴの新品種導入試験栽培

ミニシリーズ

乾燥地域の植物あれこれ <その3>

シリーズの第3回目として、アラビア半島の砂丘ではよく見かける野生のスイカ「コロシントウリ」を紹介したい。学名は *Citrullus colocynthis* という。

「コロシントウリ」という名前をはじめて知ったのは、小堀巖先生の著書「沙漠-遺された乾燥の世界」だったと思う。私が国際協力の世界に入るきっかけとなった本だ。沙漠では様々な興味深い植物が乾燥に耐えて生きているものと驚かされたものだ。この植物をはじめて実際に目撃したのは、ルブアルハリ沙漠東部、アラブ首長国連邦の内陸に広がる砂丘を歩いている時だった。ちょうど野球のマウンドのように砂が盛り上がり、そのマウンドをつる性の植物が覆っているのを発見した。よく見るとテニスボール大の果実がいくつも実っており、縞模様が入っているのでどう見ても小さなスイカに見える。すぐに思い出した。「やった！これがコロシントウリだ。」



さらによく見ると、同じようなマウンドが周辺にいくつも観察出来た。つるで覆われた部分に移動してきた砂が少しずつ堆積し、いつの間にか野球のマウンドのようになったものらしい。果実は緑色で縞模様のあるものだけでなく、黄色くなってカラカラに乾燥したものまで様々だ。カラカラになったものは皮と種だけになっているらしく、振るとシャカシャカといい音がして楽器のようだ。セルロイドで出来た赤ちゃんのおもちゃに同じようなものがあったような気がする。



この辺りの沙漠にはキツネ、ウサギ、ネズミ等々かなりの小動物が生息している。また、遊牧の民がラクダ、ヤギ、ヒツジを連れて周辺を歩き回っている。こうした動物達に、よく食い荒らされないものだと思っていたが、そこには植物達の知恵があった。このスイカ、メチャメチャ苦い。このスイカを食べたラクダは顔をしかめると言われている！？ためしにかじってみたが、確かに苦い。

カラカラのスイカでシャカシャカして遊んだ後、皮を開くと種子がたくさん出てくる。この種子を日本に持ち帰って、耐乾性スイカの育種に使おうという試みも行われた。しかしながら、どうしてもこの苦みを克服することが出来なかったと聞いている。

次に、思いがけないところでこのコロシントウリに出会うことになる。場所はシリアの首都ダマスカス、オールドスークの薬屋さん。薬屋さんとはいっても、店先には様々な薬用植物の葉や根や実だけでなく、カラカラに乾いたトカゲやその他訳のわからないものが所狭しと並べられている。お客さんは自分の症状を店主に説明する。店主は客の症状に応じた材料を調合し、用法用量を説明しながらお客に対応する。この薬屋さん、かなり良く効く薬を調合してくれるようで、いつ行っても多くの客で混雑している。私は下痢が治らなくて困っていた時に、カウンターパートが連れて行ってくれた。3種類くらいの植物を調合してくれたが、確かに良く効いた。この薬屋さんの店先に、コロシントウリが並んでいた。見つけた時は、なんだかすごく懐かしかった。確かに、この植物は薬用植物として、ヨーロッパ各地で栽培されてきたらしく、果実に強い瀉下作用があるとされている。また、聖書の植物のひとつとしても紹介されている。



最近になって、カラハリスイカという名前を時々耳にする。この植物もカラハリ沙漠に生育する野生のスイカだ。このスイカに含まれるシトルリンという成分が、化粧品や医薬品に使えそうということで、多くの企業が着目しているらしい。奈良県では大和野菜復活そして農商工連携活動一環として、カラハリスイカを使った町おこしが実施されているそうだ。これにヒントを得て、コロシントウリを使った乾燥地域での町おこし、地域おこしを考えてみたい。